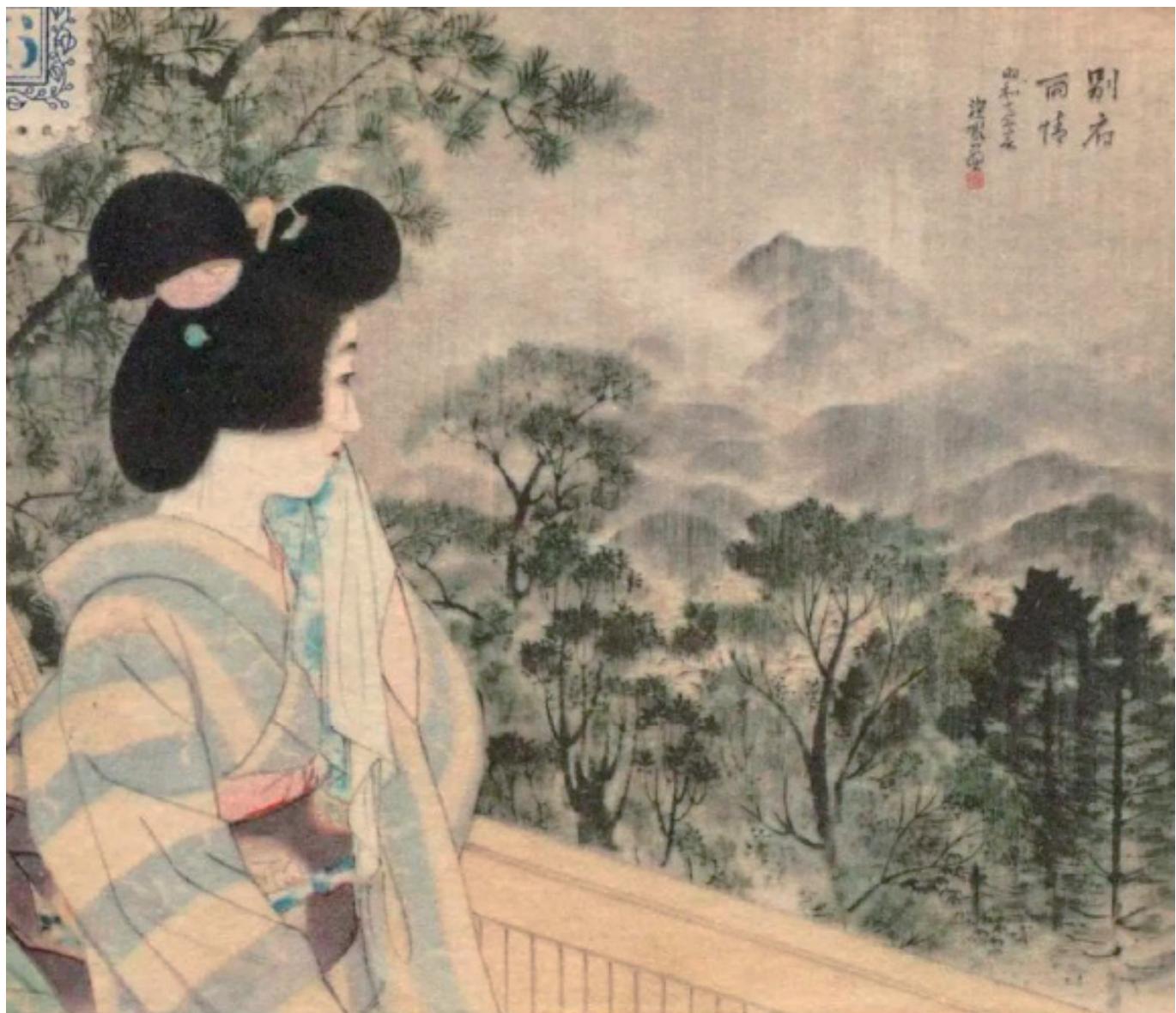
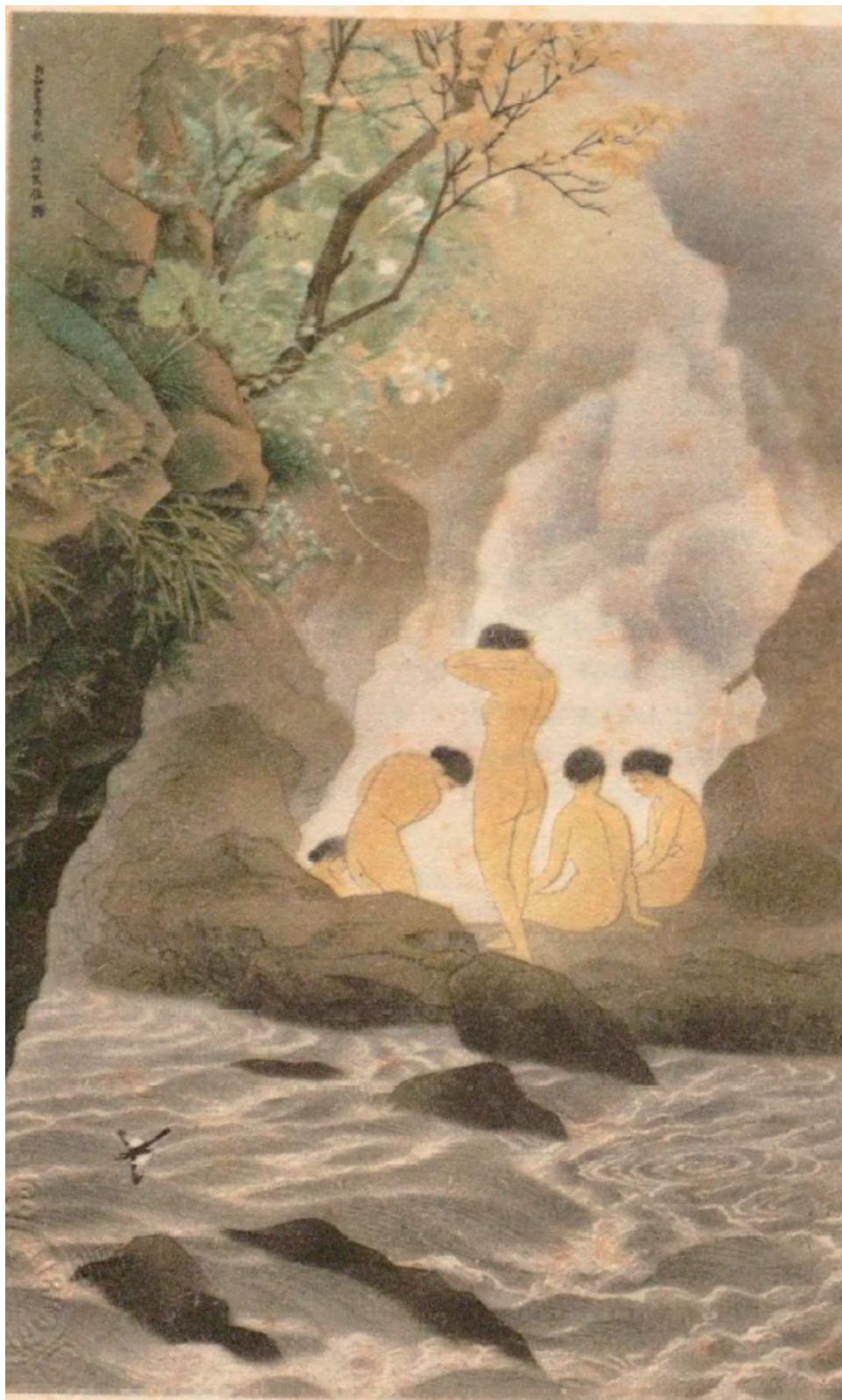


日本の温泉

藤浪剛一



いけだてるかた
表紙絵 池田輝方 夏の雨（別府のいで湯）



口絵、乙女の朝の湯浴み (伊東深水) [訳注:原題は「淨晨」]
Enshū Ito, illustration for 'Ejō no Yūyumi' (Morning Bath of Maiden), [Note: Original title is 'Seishin' (Pure Morning)]

編者序文

観光客が、訪れる国の美しい景色をみるとどまらず、その国の文化について何かを学びたいと願うのは一般的なことである。「見る」ことは「学ぶ」ことより当然簡単であるが、単なる駆け足の観光旅行では、外国の文化を垣間見る以上の時間や機会はほとんど得られないものであり、これは特に日本において当てはまる。

観光局は、外国人観光客に日本特有の文化の様々な側面に関する正確な情報を提供するという高邁な目的を達成することの難しさを認識しており、本叢書の発行によりこの責務を可能な限り果たすよう努めるものである。

本叢書は完成すると 100 冊以上となる予定で、それぞれ異なるテーマを扱いながら互いに連携したものである。従って、全体を通読することで、日本を訪れる外国人はこの国で長年にわたり培ってきた文化について知識を十分に得ることができるであろう。

さらに詳しく研究したい方のために、参考文献を付した。これは研究を進める上で信頼に足る手引きとなるものと信ずるものである。

日本国有鉄道 観光局

ツーリスト・ライブラリー

既刊

1. 日本の茶道文化 Y. Fukukita, A.B.
2. 日本の能 Prof. T. Nogami
3. 桜 M. Miyoshi, D.Sc.
4. 日本庭園 Prof. M. Tatsui
5. 広重と日本の風景 Prof. Yone Noguchi
6. 日本の演劇 B. T. I.
7. 日本の建築 Prof. H. Kishida, D.Sc.
8. 神道とは？ Prof. Kato, D. Litt.
9. 日本の城 Prof. S. Orui, D. Litt and Prof M. Toba
10. 日本の温泉 Prof. K. Fujinami, M.D.

続刊

- | | |
|----------|---------------------|
| 日本の華道 | Issotei Nishikawa |
| 日本の子供の行事 | T. Iwado, M.A. |
| 着物 | Kenichi Kawakatsu |
| 日本料理 | Prof. Kaneko Tezuka |

目次

I . 日本人の入浴好き

II . 温泉にまつわる伝承

III . 温泉の分布

IV . 温泉療法

1. 単純泉
2. 炭酸泉
3. アルカリ泉
4. 鉄泉
5. 硫黄泉
6. 土類泉
7. 食塩泉
8. 苦味泉
9. 放射能泉

V . 日本の温泉の特徴

- 砂湯（砂風呂）
- 蒸し風呂
- 滝湯
- 時間湯
- 長時間低温浴
- 温泉の商業利用
- 温泉華
- 間欠泉
- スキーと魚釣り

VI . 都市近郊の温泉地

- 箱根
- 伊豆
- 東京近郊
- 大阪、神戸
- 仙台
- 長野
- 金沢
- 鳥取、松江
- 四国
- 九州
- 北海道

訳注：各章（I～VI）の小見出しが原書にはないが、便宜をはかつて追加した。

I. 日本人の入浴好き

日本人の風呂好きは良く知られている。恐らくこれほど多くの入浴好きは他国にはいない。多くの人が夜、時には朝から熱い風呂に入ることをならいとする。平均的な日本の家庭には、広い豪華なものであれ、あるいは簡単な付け足しのようなものであれ、浴室がある。不幸にも自宅に浴室がない家では、毎日のように公衆浴場に通う。日本人は幼時から温泉への愛着を深く植え付けられており、古くから伝わる詩句、唱歌、戯画などに、温泉に対する国民的感情が反映されているのも不思議ではない。

ヨーロッパの衛生観念とは裏腹に、日本人は 104-110°F [40-43°C] という非常に熱い風呂に入るのを好み、寒気をおこすようなぬるま湯に浸かることを基本的に好まない。日本人の日常生活に不案内な西洋人は、非常に熱い風呂からあがった日本人が、茹でダコのように真っ赤になっている（日本語では「赤い海老のよう」と表現する）のを見て驚くものである。高温の風呂に入るはどういうことか。経験すれば未経験者にもすぐに分かる。一度入ると、その至福に気付くであろう。熱い風呂に入ると、疲労がバナナの皮のように簡単に剥がれると冗談に言われるが、これは事実である。

チェンバレン (Chamberlain) は、長年にわたり注目を集めているその著書「日本の事物」(Things Japanese) の中で、「清潔さは日本の文明に特有な要素の一つである。日本の他の制度はほとんどすべて中国に起源を持つが、浴槽は例外である」と記している。確かに、中国人、韓国人は日本人ほど入浴に熱心ではない。ちなみに、これは西洋人が「東洋的」という形容詞の用法に注意すべき例である。東洋人が入浴を好む、あるいは清潔さに情熱を傾けると言うのは、明らかに不適切である。この点を裏付ける例を挙げよう。1493 年、朴瑞祥ぼくずいじょうという朝鮮通信使が来日した。当時の首都、京都で、彼は清潔を強く愛する日本の入浴制度に深く感銘を受けた。そして帰国すると直ちに、都市に公衆浴

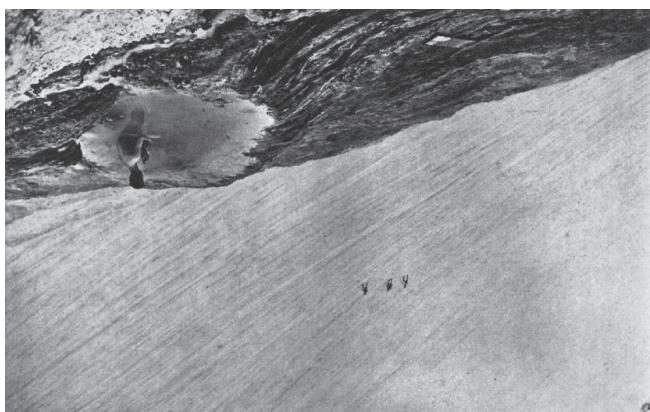


図 1-1. 日本の屋根、白馬岳の露天温泉風呂。日本最高地 (6,900 フィート [2,100 m]) の温泉である。

場を建設すべきであると当局に提案したが、全く聞き入れられなかった。

仏典の中には、入浴の効用について述べているものがあり、入浴に言及している經典も少なくない。これは世界の他の宗教にはほとんど見られない事である。京都、奈良の大きな仏塔を訪れた際には、ぜひ寺院の案内人に浴堂について尋ねられたい。案内人は熱心に語ることであろう。その情報は興味深いと同時に有用なものである。当然のことながら浴堂は他の建物よりも小さいものの、寺院建築の要の一つとなっている。僧侶に入浴に際しては厳しい規律が課せられ、「入浴の二十五戒」[訳注：大比丘三千威儀經にある入浴室有二十五事と思われる（藤浪剛一・東西沐浴史話）]と呼ばれる規則を厳守しなければならない。仏教の教えによれば、入浴は洗浄、純化と同義である。七福をもたらし、肉体に宿る七病を取り除く効能があるとされる。現代科学の観点からも、入浴は心身の疲労回復、健康増進、疾病治癒、そして少なくとも気分爽快をもたらす効果があるとされる。

歴史を振りかえると、仏教は西暦 553 年に日本に伝えし、民衆のみならず皇族も仏教の信者となった。推古天皇 (592-629) の御代には寺院が建立され、以後仏教は日本の文化に安定剤的な影響を与えてきた。奈良近郊の法隆寺は、7 世紀初頭の建造物の中でおそらく最も重要なものである。仏教が最盛期を迎えたのは奈良時代 (710-783) であるが、このことは奈良に現存する百一もの貴重な遺物が雄弁に物語っている。

仏教が日本にもたらした恩恵は多岐にわたるが、その中に人々の心に植え付けられた慈悲と喜捨の徳がある。皇室が人々の境遇に配慮して、古今を通じて示してきた特有の慈悲と同情も、多少なりとも仏教に由来すると言える皇室の慈悲の一例として、聖武天皇 (724-748)しょうむの妃、光明皇后の事蹟を挙げよう。皇后は若い頃から仏教の信者であった。当時最も美しい女性の一人とされ、仏師による彫刻もある。皇后は仏陀の教えからとりわけ沐浴の徳を学び、奈良法華寺の浴堂で、乞食や癱者など数千人もの庶民の体を洗い清めたと伝えられる。これは、私的な慈善活動で知られるハンガリーの聖エリザベートを彷彿とさせるものである。光明皇后はまさに聖女であった。仏教あるいは他の宗教の熱心な信者でなければ、このような卑屈な行為は不可能であろう。この貴人の崇高な模範は、後に適切な言葉がないため「施浴」と呼ばれる慣習を生んだ。これについて簡単に触れておこう。

日本人の歴史を研究すると、信仰から生まれた慈善、慈悲に関する感動的な物語が数多く見出される。前述の光明皇后の慈善行為から生まれた施浴の風習は、ま

さにその典型である。この施浴は、リチャード獅子心王の時代とほぼ一致する鎌倉時代に盛んに行われたようである。これは、亡き父祖の靈を祀る者が、老若男女、親疎を問わず、道行くすべての人に施浴の機会を与えるという風習であった。こうした施浴が行われた時期は専ら状況に応じて異なるものであった。

人々に入浴の機会を提供するこの風習は、次第に入浴全般への愛着を喚起し、先人たちは日本各地に湧出する天然の温泉を利用するようになった。温泉を利用する習慣の起源をここに求めることは誤りであろう。なぜなら、仏教伝来のずっと以前から、この国では温泉が相応に普及していたと考えるに足る十分な理由があるからである。しかし、施浴の風習により、民衆が温泉を以前よりも有効に活用するようになったことは確かである。



図 1-2. 法華寺の浴堂 (奈良)

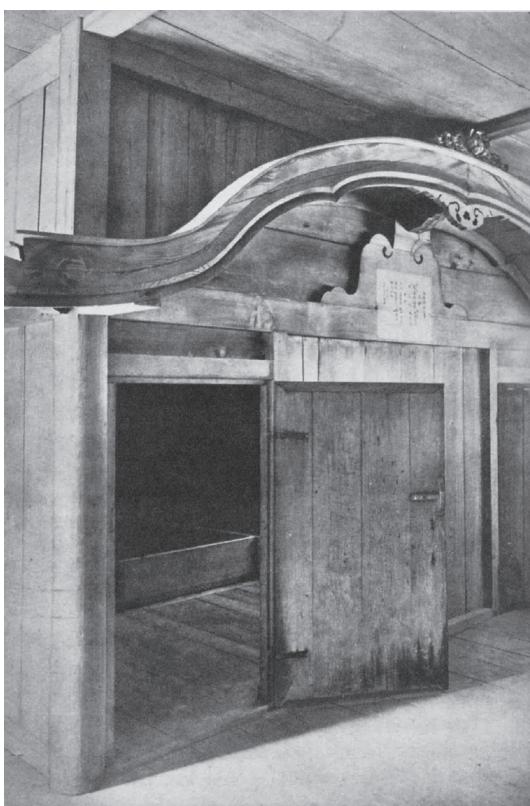


図 1-3. 東大寺二月堂の浴堂 (奈良)

以上のことから、温泉入浴への国民的情熱が、火山が点在するこの国に豊富にある温泉を日本人が広く利用する主な理由であることは容易に推測できる。温泉の人気は一貫して非常に高い。今日では、人々は単に湯治のためではなく、しばしば休暇を過ごすために温泉地を訪れている。近年、都会の人々の間では週末を各地の温泉で過ごすことが一般的になっており、実際国鉄ではこうした週末客に便宜をはかる特別列車を運行することが、収益性の高い事業となっているほどである。1929年には「日本温泉協会」という重要な組織が設立され、鉱泉に関するあらゆる事項が適切に扱われるよう監督する多数の専門家を会員に擁している。

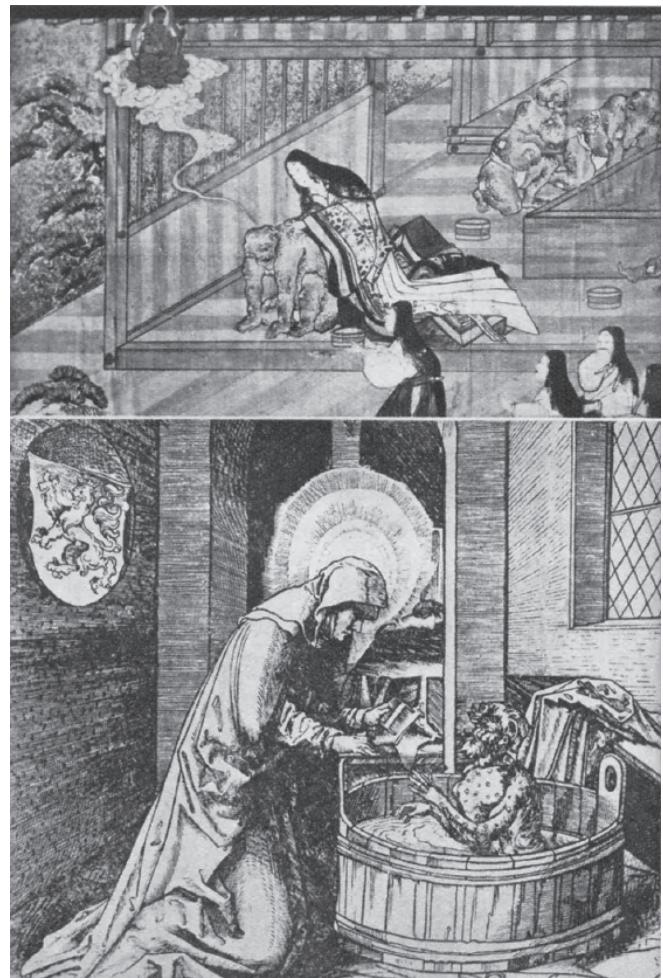


図 1-4. 東西文明の出会い. 光明皇后(上),
聖エリザベート(下)による施浴

II. 温泉にまつわる伝承

温泉に恵まれた他の国々と同様、日本にも温泉に関する数多くの民間伝承が存在する。カールスバートの温泉狩猟の途上でカール5世が発見したという伝説は、あまりにも有名で、ここで触れるだけで十分であろう。南ドイツの温泉にまつわるまた別の伝説では、神が母親の夢に現れ、その助言に従って、盲目の赤ん坊の目を鉱泉の水で洗ったところ目が見えるようになったという。

同じような伝説は日本にもあり、このような伝説は興味深いものであると同時に日本の温泉を研究しようとする者には有用なものといえよう。

既に述べたように、日本人は太古の昔から温泉を利用してきた。伝承によれば、早くも紀元前700年には人々が温泉を知っていたという。こうした由緒ある温泉の中には、今も広く親しまれているものがある。例えば熱海、修善寺、諏訪、道後などは、こうした数世紀にわたる歴史を持つ温泉である。全国には温泉、冷泉合わせて千近い鉱泉が点在している。したがって、これら温泉にまつわる様々な伝説が代々語り継がれてきたのも首肯しうるところである。

まず、様々な温泉の化学組成が人々の想像力をかき立て、温泉の命名に影響を与えた点を考察してみる。宮城県鳴子温泉をはじめとする多くの温泉が「うなぎ湯」として知られているが、これはアルカリ性温泉が一時的に肌をぬめり気のある状態にすることから名付けられたものである。鉄泉の名称にはしばしば「赤」の字が含まれる。これは、湯が赤みを帯びているためである。新潟県の赤倉温泉、青森県の赤川温泉などはその例である。また塩分を含む温泉も非常に多い。塩原、塩の湯、八塩、塩山といった名称を見れば、これらが塩泉であることを即座に理解できる。塩の漢字は日本語で「しお」「えん」の二通りに読まれるからである。また、湯が入浴者の肌に与える作用の違いによって、様々な名称が付けられている。例えば針湯、荒湯、綿湯、熱湯などが挙げられる。こうした名称から温泉の化学組成を推測するのは時に興味深いものである。

また、効能を物語る名前の温泉も数多く存在する。例えば浅間温泉の目湯は、言うまでもなく眼病に効能がある。秋田県には、目湯沢という温泉もある。伝説によれば、目湯沢の湯の靈験により、この地の裕福な家の令嬢が長年苦しんでいた眼病が完治したという。先に触れた鳴子温泉には、蛇の湯と呼ばれる泉があり、蛇に噛まれた傷に効能があるとされる。山形県の肘折温泉は、外傷に効くことからこの名が付けられた。また有名な別府には、水虫に極めて著効があるとされる湯がある。これは「田の湯」と呼ばれ、疥癬を意味する日本語「たむし」に由来する。

発見時の状況にまつわる伝説に由来する名称を持つ温泉も数多く存在する。このような伝説では、鳥や動物が泉の水に浸かっているところを発見されたというものが多い。鹿、熊、鶴、鷺などの名称を持つ泉がいくつか存在する。

長野県上田市近郊に鹿教温泉がある。この温泉の名前の漢字は、その発見にまつわる事情を示している。伝承によ



図 2-1. スキーヤーの疲れを癒やす定山渓温泉（北海道）



図 2-2. 定山渓温泉（北海道）



図 2-3. 川治温泉（日光近郊）の岩風呂

れば、はるか昔、狩人が獲物を求めて山奥へ迷い込んだところ、草むらに横たわる鹿を発見したという。狩人が近づくと、鹿は逃げようともせず、むしろ哀願するかのように見えた。狩人はその鹿が脚を怪我していることに気づいた。鹿のそばからは湯気がもうもうと立ち上っていた。明らかに傷ついた鹿は温泉に浸かった後、休息を取っていたのであった。伝説は狩人が鹿に憐憫をおぼえて立ち去ったか否

かについては語っていない。しかしそれはさほど重要ではない。重要なのは、この種の伝説が数多く存在し、それらがすべて鳥や動物、特に泥浴を好む性質の鹿が、万物の長たる人間が占有するか以前から、鉱泉水の治療効果を本能的に認識していたことを示している点である。

想像力を少し働かせれば、現在人気の温泉地の大半が、発見当時は狩人や木こり以外ほとんど訪れない地域であったことが理解できる。傷ついた鳥や動物が鉱泉を利用しているのを見て偶然鉱泉を発見した狩人や木こりは信心深い人々であったが、毛皮や羽毛を持つ生き物が人間に劣らない知性を持つとは考えられるほどに科学的ではなかった。彼らは、そうした鳥や獣を神の遣わした使者と信じ、いやむしろ神の化身とすら考えた。従って、迷信深い人々の間では、鉱泉の治効と神々への祈りの靈験が頻繁に結びついたのである。

前述の鹿教温泉は、文殊の泉とも呼ばれる。別の伝説によれば、泉の近くで発見された傷ついた鹿が、知恵と叡智の神である文殊菩薩の化身であったとされるためである。日本の民間伝承には、神託によって温泉が発見されたことを示す物語が数多く存在する。

このような伝説として最も一般的なものは、長患の回復を願う祈りが聞き届けられ、夢の中で神託が下され、夢に現れた泉を求めて旅に出て成功する物語である。このような祈りが、仏教の二大医神たる薬師如来と大日如来、そして神道の医神にも捧げられたと想定されるのは当然のことである。なお、この方面的研究は、日本人の宗教的信条を研究する好材料を提供してくれるであろう。

一方、同様の伝承があるにもかかわらず、それにちなんで命名されていない温泉もいくつか存在する。例えば、九州の佐賀県にある武雄温泉は、伝説によれば朝鮮出兵で知られる神功皇后が白鷺が入浴しているのを見て、この温泉を発見したという。しかし、現在の温泉の名称は鷺とは全く無関係である。

山中の温泉の発見は、多くが行基菩薩(670-749)、空海(弘法大師、774-835)など著名な仏僧に帰せられている点は興味深い。これは、かつて僧侶たちが崇高な聖地と見なす高い山へ巡礼の旅に出たことに由来する。現代の日本人と同じように、僧侶たちは現代でいうハイキングや登山に興じたのである。彼らは山を登り谷を下り、険しい峰をよじ登り、山の奥深くへと足を踏み入れた。従って、その放浪の途上に鉱泉のようなものに出くわす可能性は十分にあった。昔は占い師が泉の発見に関与したことがあったようで、これはオーストラリアなどで山師が水探しの棒で地下水脈の存在を発見する様子と酷似している。また、遠征中の将軍が偶然泉を発見したという話も存在する。

紙幅の制約で、この話題について詳しく論じることはできないが、日本の考古学研究者にとって、鉱泉を巡る民俗学の検討が有益であることに疑念がないことを伝えるには十分であろう。

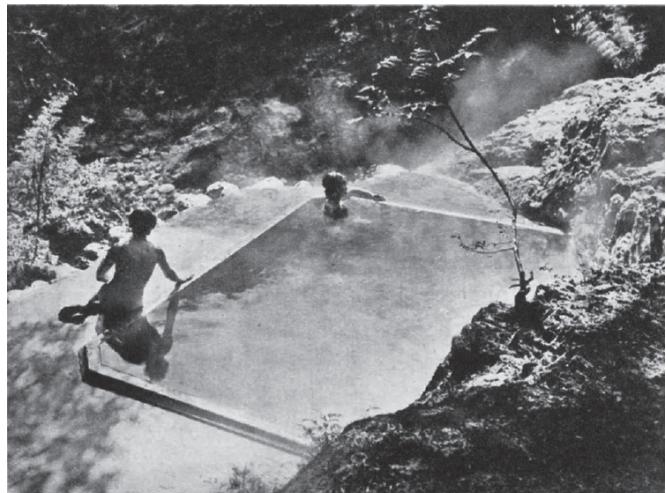


図 2-4. 恋人たちの自然の楽園 (ささの湯)



図 2-5. 秘境の露天風呂に入る三人の女性 (草津温泉)



図 2-6. 自然の岩屋の温泉

III. 温泉の分布

地図を一見すれば、温泉が全土にわたって、秋の夜空に輝く星々を思わせるほど数多く点在していることがわかる。この豊富な温泉資源は、当然ながら主に休眠状態にある火山が広く分布していることに起因しており、火山帯がこれらの温泉の分布と密接に関係しているのは自然のことである。

世界地理の初步を学べば分かるように、日本は長い列島から成り、最北端の千島列島は東経156度31分、北緯50度55分まで伸び、最南端には台湾が位置し、東経120度49分から北緯21度46分に及ぶ。日本は6つの主要島嶼から成り、すなわち樺太、千島列島を含む北海道、本州、四国、九州、台湾である。南東は太平洋に面し、北西は日本海に面している。

日本の本土（北海道、本州、四国、九州）は、その地形から便宜上、南西部、中央部、北東部の三つの地域に分けられる。

南西部には九州、四国、本州西部が含まれる。この地域はいくつかの山脈を有するものの、特に高い山があるわけではない。九州の主要な火山帯は、阿蘇と霧島である。

阿蘇山脈は別府、阿蘇、雲仙の温泉を擁し、霧島山脈は霧島、指宿の温泉を含む。四国には有名な道後温泉がある。そして本州の西部、より正確には山陰地方には、白山火山帯に含まれるいくつかの温泉がある。中央部は、世界的に有名な富士山やいわゆる日本アルプスを含む数多くの高い山々が特徴である。飛騨山脈の東側には、温泉の豊富さで知られる乗鞍火山帯が連なる。この地域で最も重要な県（少なくともここで述べる目的において）は長野県で、114もの温泉を誇っている。これほどの温泉は擁する県は他に存在しない。この地域には標高10,000フィート[3,000m]を超える山々が数多く存在する。雪を冠した峰々、透明き通った急流、絵のように美しい渓谷が、この地方特有の景観を作っている。この地域の地理を語るにあたって、広大な関東平野と、美しい景観と豊富な温泉で知られる伊豆半島に触れずにおくことはできない。

東北地方は、関東平野の北側に位置する地域である。この地域の中央部には那須火山帯が走っており、そのため数多くの温泉に恵まれている。西部も同様に温泉が豊富で、休火山である鳥海山群が存在する。この地域に位置する秋田県には70もの温泉が存在する。中部が山岳渓谷の景観で特に知られるのと同様、この地方は湖沼景観に優れている。八郎潟、猪苗代湖、十和田湖は、東北地方を訪れる多くの観光客にとって馴染み深い存在である。

北海道には、前述の那須火山帯の延長にあたる火山帯が走っている。もう一つの主要な火山帯は千島列島である。交通機関が比較的未発達であるため、北海道の温泉はあまり知られていない。おそらく最も有名なのは登別温泉で、ここでは温泉が湧き出ている。千島列島を構成する無数の島々にも温泉が存在する。

おそらく読者は、このつまらないまるで地理の授業のよ

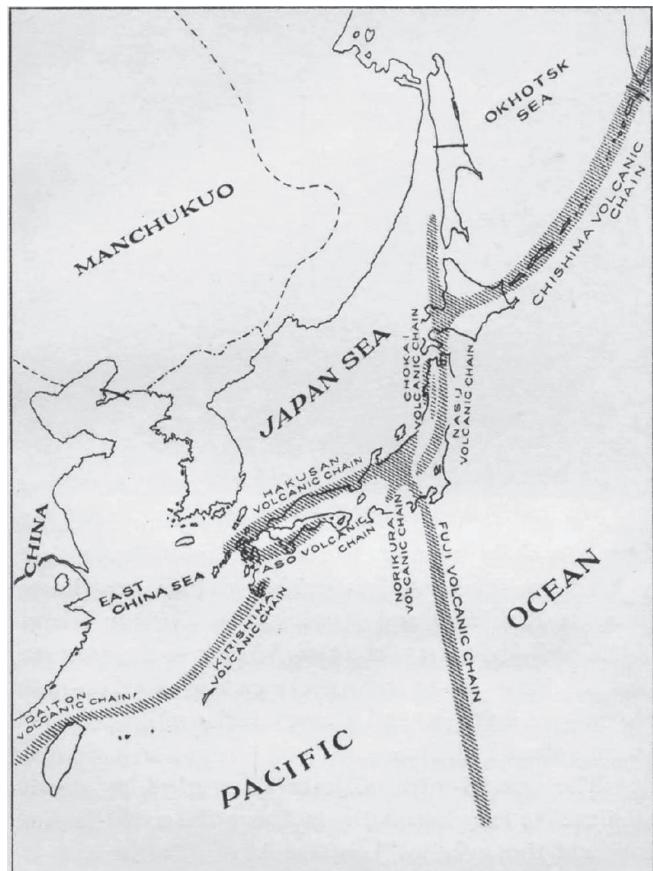


図3-1. 日本の火山帯分布図



図3-2. 阿蘇山の火口



図3-3. 雲仙温泉近郊の雨氷

うな、退屈極まりない試みに辟易しているであろう。以上述べたことから、温泉の分布はほとんどが火山帯の走向により決定されることがわかった。しかし、一部の地域では、温泉も冷泉と同様に、火山帯から離れた地域に存在する。日本本土には、温泉と冷泉合わせて約 946ヶ所あり、温泉の数は冷泉の約 6 倍である。ある場所では複数の泉がまとまって湧き出ているが、別の場所では互いにかなりの距離を置いて噴出している。

興味深い点は、温泉が群発している場合も、必ずしも同一の性質を持つとは限らない点である。したがって、化学組成が全く異なる二つの源泉が、わずか約 15 フィート [5m] の距離で湧出しているのを目にすることがある。日本の温泉に特有の点の一つは、湯治客が必要に応じて異なる性質の湯を利用できることである。もう一つの特徴は、先に触れたように、湖や急流、滝、渓谷、紅葉、優美な火山といった自然美の要素が、多くの温泉地の景観に魅力と幻想的な趣を添えていることである。

温泉が湧き出る場所は、その広がりと同じく多様である。山の中腹、高原、渓谷、海岸、平野など、あらゆる場所に存在する。

当然ながら、山岳地帯には多くの高い山並みと峡谷が特徴的であるが、火山には広大な麓があり、こうした地域では温泉は通常、山腹や高い山麓、あるいは谷間に湧出している。日本で温泉の湧出が確認されている最高標高は海拔 6,900 フィート [2,100m] の長野県白馬温泉である。^{しきょうま} 次いで高いのは長野県の本沢温泉 (6,750 フィート [2,000m])^{ほんざわ} と群馬県の万座温泉 (3,430 フィート (1,000m))^{まんざ} である。標高約 5,000 フィート [1,500m] 地点に 5ヶ所、3,300～5,000 フィート [1,000～1,500m] 地点に 38ヶ所、2,300～3,300 フィート [700～1,000m] 地点に 31ヶ所の温泉が確認されている。このような高地の温泉地は、概して豊富な温泉水に恵まれ、周囲の景色を遮るものがない。高山植物や無数の小鳥のさえずりが、高地の温泉地の魅力をさらに引き立てることもしばしばである。

温泉は川や溪流にも見られる。溪流の片側あるいは両側から湧出したり、あるいは水面下から沸き立つように湧き出るところもある。いわゆる本来の川岸に見られることは稀だが、城崎^{きのさき}や三朝^{みささ}の温泉はこの稀な類にである。

山地ほど高くないものの、高原にも数多くの温泉が点在している。これらの温泉地の多くは魅力的な森林景観に囲まれているため、温泉療養だけでなく、大気療法にも絶好の機会を提供している。こうした温泉地の季節ごとの魅力は、いくら強調しても足りないほどである。目にも鮮やかな常緑樹に加え、初夏には新緑に彩られ、秋には紅葉で燃え上がる落葉樹林 — 典型的な日本の森林風景は、穏やかな滝が飾る水晶のように澄んだ小川、深いエメラルド色の淵、大小様々な奇岩が点在して、その美しさを一層引き立てている。温泉地は概してこうした絵のように美しい環境の中に位置している。景観の美しさを温泉療養の要素と考えるならば、日本はこの点において疑いなく最も恵まれた国である。



図 3-4. 北アルプスを望む



図 3-5. 比類なき富士山と芦ノ湖



図 3-6. 箱根の芦ノ湖は是非訪れるべきところである

温泉が平野や田園地帯に湧き出るのは主に九州と関東地方で、ほとんどすべての海岸で入浴が可能である。このような保養地の利点は、夏場には訪問者が近くの温泉と海の両方で入浴できる理想的な健康リゾートとなることである。さらに、こうしたリゾートは大都市からそれほど遠くない場所に存在する。また、海に面した温泉の大半は太平洋を望むため、優れた避寒地となる。^{いぶすき}海岸沿いの温泉は砂風呂と呼ばれる。九州の別府温泉、指宿温泉の特色であるこうした天然砂風呂は、人工のものよりはるかに満足できるものである。

標高の高い温泉リゾートの欠点の一つは、冬の間は閉鎖せざるを得ない点である。その理由は明らかである。この点ではスキーヤーにシーズン中に多く訪れる丘陵地帯のリゾートの方が恵まれている。ちなみに日本のスキーリゾートの利点の一つは、スキーヤーが自然の湯に浸って疲れを癒せる所が多いことである。



図 3-8. 雌阿寒岳から阿寒湖越し望む雄阿寒岳（北海道）



図 3-7. 日本のリビエラとも言われる熱海温泉近郊の自動車道路



図 3-9. 阿寒富士と青沼湖（北海道）

IV. 温泉療法

古来より、鉱泉の治療効果は世界中で認められてきた。ヨーロッパでは、鉱泉の奇跡的な効能は、そこに存在する何らかの靈的作用によるものと長年信じられてきた。医学と化学の近代的進歩によりこうした迷信は否定されたが、真に満足のいく説明はまだ研究途上である。

温泉療法には、温泉飲用、温泉浴、天然蒸気浴のほか、各種の泥や砂による温熱療法が含まれる。従って、前章で詳述したように温泉が豊富な日本では、このような治療法が特に注目に値するのは言うまでもない。

鉱泉が人体に及ぼす作用は、複雑であると同時に纖細、微妙である。実験により、人工泉水の治療効果は天然泉水に及ばないことが証明されている。鉱泉の化学組成は極めて少量であるが、それでもなお高い治療価値を有する。例えば鉄泉を内服した場合、体内に吸収される鉄分はごくわずかな量に過ぎない。それにもかかわらず、鉄泉が貧血に極めて有効であることは周知の事実である。同様に、単純鉱泉水は、疼痛緩和や神経障害の治療において、普通の淡水浴よりも高い治療効果を持つ。

鉱泉の治療効果に関する正しい知識は、健康増進を目的とする温泉地の選択に重要な役割を果たす。鉱泉の化学分析やその治療効果に関する記述は確かに有用ではあるが、一般読者の興味を引くものではないだろう。しかし、この種の冊子から鉱泉の治療作用に関する説明を完全に省略することはできない。硫黄、硫酸鉄、塩分が、日本の温泉における主要な鉱物成分である。

以下に日本の鉱泉の一般的な分類を示す。

1. 単純泉

この種の温泉の治療効果は、水と温度の作用に由来する。片頭痛、肋間神経痛、坐骨神経痛、神経障害、神経痛、リウマチ、婦人病などに有効である。

青根、浅間、熱海、別府、道後、五色、畠毛、飯坂、伊東、菰野、武藏、長岡、立願寺、龍神、作並、武田尾、武雄、山鹿など多くの温泉がこれに類する。

2. 炭酸泉

炭酸泉の水には1グラム以上の遊離炭酸が含まれており、内服と外用の両方に用いられる。内服すると消化器の働きを促進し、食欲を増進させる傾向がある。消化不良、膀胱カタル、気管支カタルに効果的である。

炭酸水は味が良く保存が容易なため、優れた飲料水として広く利用され、しばしば医療用にも用いられる。
平野水、布引炭酸、ウィルキンソン炭酸、日本エビア



図 4-1. 熱海温泉。その健康に適した気候、景観、豊富な温泉で良く知られる。

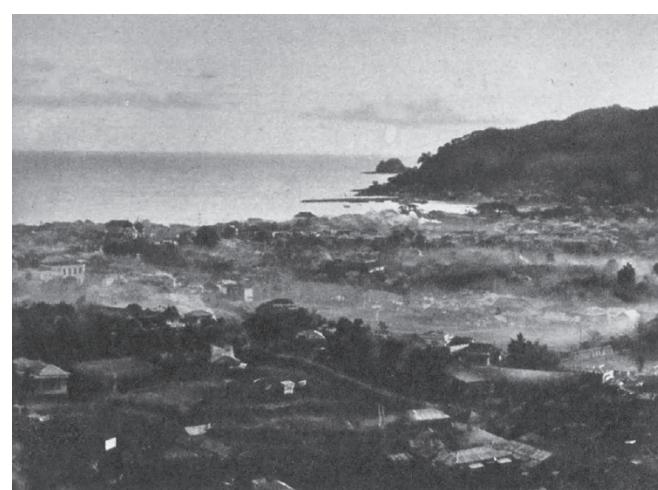


図 4-2. 伊東温泉。温泉郷として通年人気がある。



図 4-3. 塩原温泉。紅葉で知られる。

ンなどの商品名で、人気の市販飲料となっている。

有馬、別府、不老、堀田、宝塚、湯本などがこれに属する。

3. アルカリ泉

原則として、アルカリ泉水は炭酸ナトリウムを多く含み、遊離炭酸の比率は大きい場合も小さい場合もある。遊離炭酸を一定量含むアルカリ泉はアルカリ炭酸泉と呼ばれる。硫酸塩または土類を含む場合は、それぞれアルカリ塩泉または土類アルカリ泉という。

内用すると、過酸性消化不良、膀胱カタル、胆石、結石症、胆囊炎、糖尿病などに効果がある。含嗽水として使用すると、鼻腔、気道カタルに効能がある。アルカリ泉の入浴は、神経衰弱、不妊症、骨折、前立腺肥大などに有効である。炭酸ガスを大量に含む場合、心疾患、動脈硬化の治療に用いられる。

この種の温泉としては、以下のようなものがある。

- a. 単純アルカリ泉 — 塩原
- b. アルカリ炭酸泉 — 磯部、白濱、湯村、湯崎
- c. アルカリ芒硝泉 — 赤倉、城崎、妙高、塩原、嬉野、湯崎
- d. 土類アルカリ泉 — 白船

4. 鉄泉

鉄泉水の最も重要な成分は、文字通り鉄である。水中に硫酸を含む場合は緑礬泉と呼ばれる。時に炭酸も含まれることがある。鉄泉はその成分に応じて、炭酸鉄泉、炭酸鉄食塩泉と呼ばれる。

鉄泉水は、血液に対する治療効果が顕著である。他のいかなる鉄分補給剤よりも血液に必要な鉄分を供給する能力に優れていることが明らかに実証されている。このため貧血、鉄欠乏症に効果的である。またマラリア、精神衰弱、慢性神経障害、婦人病、ヒステリーなどにも有効である。

鉄泉水は、飲用、浴用ともに用いられるが、消化不良がある場合は飲用するべきではない。結核には禁忌である。

この種の温泉には、以下の様なものがある。赤湯、有馬、別府、嶽、小涌谷、鉄輪、柴石、高湯、東郷、八塩。

5. 硫黄泉

これらは遊離硫化水素、硫化アルカリ金属、及びその二次生成物を含む。冷硫黄水には時に炭酸ガスが含まれる。硫黄泉は一般にいくつかに分類されるが、実用上は必ずしも必要ではない。

日本にはこの種の温泉が豊富である。その治療効果については、まだ研究の余地が大きいが、経験上硫黄泉



図 4-4. 別府温泉。「驚異の温泉街」として世界的に有名である。



図 4-5. 日光(湯本)温泉。ウィンタースポーツの客が集まる。

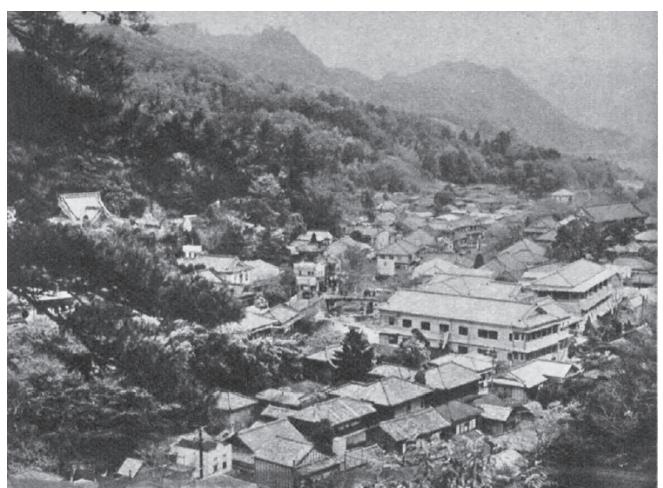


図 4-6. 修善寺温泉。伊豆半島の最も人気のある温泉郷である。

は肝臓疾患、慢性金属中毒、梅毒、慢性気管支カタル、皮膚病、瘧疾、脊髄疾患、カリエスなどに有効である。水温が高いほど治療効果は大きいようである。蒸気を吸入すると、慢性気管支カタルに有益である。これは硫化水素が粘膜を刺激し、喀痰を促進するためである。日本ではこの種の温泉はしばしば「痰の湯」と呼ばれるることは興味深い。

硫黄泉の中でも特に重要なのは以下の温泉である。

朝倉、粟津、河原湯、武藏、中房、鳴子、那須湯本、野澤、酸ヶ湯、燕、山中、山代、湯の峰。

6. 土類泉

土類泉は、カルシウム、マグネシウム塩、炭酸第二酸化鉄、炭酸ソーダ、食塩など大量のミネラルを含む。大量の炭酸ガスを含む場合、いわゆる土類炭酸泉となる。土類炭酸泉において硫酸カルシウムが優勢な場合、石膏泉と呼ばれる。日本ではこの種の泉はほとんど見られない。

土類泉は、膀胱カタル、前立腺炎、関節炎、胸膜炎、骨疾患などに有効である。

この種の主な温泉は、赤川、赤湯、葛、吉野である。

7. 食塩泉

食塩泉水には、食塩のほか、アルカリ硫酸塩、硫酸塩土類、炭酸土類、炭酸第亜酸化鉄、ヨウ素、臭化物などが含まれる。食塩泉は、一般に弱塩泉、強塩泉、単純塩泉の三種類に分類される。ヨウ素を大量に含む塩泉はヨウ素泉、臭化物を含むものは臭化泉と呼ばれる。また、その成分に応じて炭酸塩泉、炭酸アルカリ性塩泉、塩泉、土類塩泉、硫酸塩泉とも呼ばれる。

前述の炭酸泉と同様、食塩泉は内用すると消化を助け、腸の蠕動運動を促進し、ヘモグロビンを増やし、代謝を促進する。従って、慢性胃カタル、十二指腸炎、胆囊炎、便秘、瘧疾、婦人病、呼吸器カタルに効果がある。これらの水を用いた入浴は皮膚疾患や骨疾患に有用である。さらに塩泉浴は、入浴後長時間体温を保つ効果がある。皮膚に残った塩の結晶が体熱の放散を防ぐためである。

日本には食塩泉が豊富で、以下の様なものが代表的である。

- a. 弱塩泉：堂ヶ島、東山、亀川、宮の下、梨木、渋、四万、塩原、修善寺、底倉、玉造、湯河原、仙石上の湯等。
- b. 単純塩泉：熱海、芦原、片山津、和倉等
- c. 強塩泉：有馬、磯部、須川、八塩等
- d. ヨウ素臭化塩泉：茂原、鳴門、志太等



図 4-7. 湯河原温泉。海に面する一方向以外は山に囲まれている。



図 4-8. 宮の下温泉。箱根唯一の温泉郷である。

8. 苦味泉

苦味泉の水には、食塩、アルカリ、土類などに加え、苛性ソーダ、硫酸ナトリウム（グラウバー塩）が含まれる。

予想される通り、これらの泉水は一般的に下剤の目的に使用され、慢性便秘、肺気腫、肥満に対して自然な効果を発揮する。

代表的な苦味泉には、伊香保、船原、東山、法師、上山、柄木、土肥、湯ヶ島などがある。

9. 放射能泉

温泉水の治療効果は、主に放射性化合物を含んでいることに起因する。あらゆる温泉には放射性化合物が含まれており、特にその含有量が顕著なものを放射能泉と呼ぶ。概して、血圧を下げる効能がある。

日本の放射能泉の中でも、次ぎの3つは注目に値する。すなわち、増富、三朝、遠刈田である。中でも三朝は重要である。

V. 日本の温泉の特徴

古来から日本の温泉は、医療用あるいはその他の目的に様々な形で利用されてきた。

鉱泉がもたらす奇跡的な治療効果は、その利用方法に大きく左右される。

以下に、日本の鉱泉の医療応用の最も特徴的な用法をいくつか紹介する。

砂湯(砂風呂)

前述の通り、砂湯は九州の別府や指宿など海岸沿いの温泉に典型的なものである。砂湯は干潮時に行われる。満潮時に流れ込む海水が温度を下げてしまうためである。入浴者は、上半身が埋まる大きさ、時には横臥して(もちろん頭部を除く)全身が埋まる深さの穴を掘る、あるいは掘ってもらう。そして、係員に横臥した体を砂で覆ってもらい、一定時間生き埋め状態とされる。温泉水の治療効果は、砂による体への圧力、海岸の新鮮な空気、そして日中なら日光浴の機会—これら全てが相まって、砂風呂は腰痛、神経痛、リウマチ、肩凝りなどに効能がある。夏季には、砂風呂と海水浴の双方を目当てに人々が集まる。

蒸し風呂

日本の温泉の蒸し風呂は、ロシア風呂、トルコ風呂に似たところがある。日本人はこの入浴法を非常に好みため、多くの温泉地で蒸気浴施設が提供されている。通常、こうした風呂は天然の蒸気が充満した部屋で入浴する—この事実こそが、人工的なロシア式やトルコ式風呂よりも効果的であることを示すものである。特に慢性皮膚病、気管支カタル、関節リウマチ、金属中毒に有用である。湯気風呂を備えた温泉地としては、かんなわ 鉄輪、しま 熱海、四万などがある。



図 5-1. 別府の砂風呂

滝湯

天然の滝湯は、豊富な温泉水に恵まれた温泉地の顕著な特徴である。温泉水を屋内あるいは屋外の浴槽やプールに導き、間断のない滝を作る。10 フィート [3m] の高さから落ちるこのシャワーの下に立つかあるいは座ると、一種の自然マッサージの効果がある。この習慣は、静かな山間の温泉地で精神障害者に熱いシャワー浴を施す治療法として用いられる。医学的に確認されているように、高温シャワー浴は脳と脊髄神経の正常機能を促す効果があるからである。また、高温シャワー浴は筋肉リウマチや神経痛にも効果的である。

ほとんどの温泉郷には滝湯があるが、登別(北海道)と霧島(九州)は特に有名である。

時間湯

非常に高温の温泉に入浴する場合、日本には時間湯と呼ばれる特別な入浴法が存在する。これは時刻と入浴時間が定められているものである。この入浴法には独自の体系があり、草津温泉と那須温泉でのみ採用されている。これらの温泉の硫黄泉は極めて高温であり、通常であれば1日4回、3分間の耐え難い試練を人間



図 5-2. 四万温泉の蒸し湯(蒸気風呂)

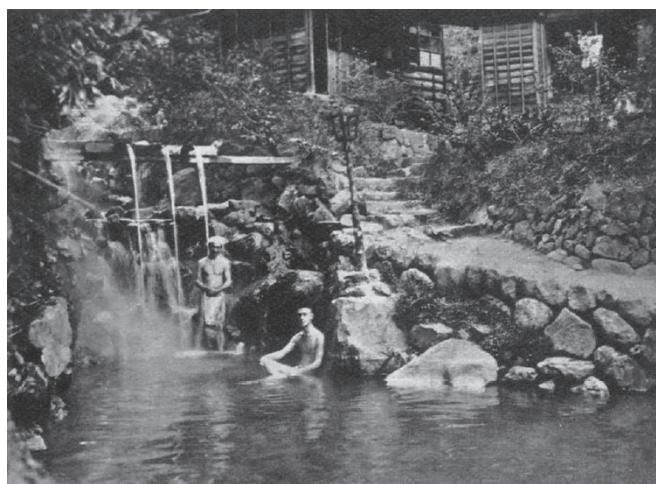


図 5-3. 滝湯(典型的な温泉水のシャワー)

が耐えることは不可能である。この問題を解決するために考案された独特かつ効果的である。

入浴者は、軍隊的ともいえる厳しい規律に従う。入浴時間の到来はラッパの音で告げられ、患者たちは宿屋を出て浴場へ向かい、浴場の湯長の命令に従って入浴する。第一段階は 15 分から 30 分で、一度に 30 人から 50 人ほどの入浴者が長方形の浴槽の周囲に並び、長さ約 6 フィート [1.8m]、幅 9 インチ [23cm] の板で水を攪拌する。水を攪拌しながら、彼らは民謡を合唱する。

熱湯が適温まで冷えると、湯長は、攪拌を止めて頭頂部と額を水で濡らすよう命じる。これは血が頭に上るのを防ぐためである。そして風呂に入る合図を出す。不幸者たちは湯の中に身を沈め、ヨブの忍耐をもって苦痛に耐える。彼らが茹だっている間、湯長は経過時間を告げることで彼らを励ます。長い 3 分間が過ぎ、湯から上がるよう告げられた時、患者たちがどれほど安堵したかは容易に想像できよう。

時間湯は慢性皮膚病、梅毒、神経衰弱の治療に効果があるとされる。草津や那須の温泉は、こうした病に苦しむ者たちが自然と訪れる場所である。



図 5-4. 時間湯(草津)。(上)湯を攪拌して適温に下げる。(下)時間湯の苦痛をじっとこらえる浴客。

長時間低温浴

この入浴法は前述の時間湯とは著しい対照をなし、適度に温かい湯に 1 時間以上浸かる方法である。湯温は中程度だが、長時間浸かることで入浴後も長く体温を保つ効果がある。これが本法の利点である。一般的な方法は、浴槽に架けられた梁に頭を載せ、足を伸ばした状態で相当時間浸かっていられるようとする。

以上は、日本において広く行われている伝統的な温泉療法の概略である。これらは長年の経験によって効果が認められてきた方法である。この地を訪れる人々は、おそらく時間湯を除けば、いずれもが素晴らしい体験であることを実感するだろう。

温泉の商業利用

温泉療法についてはここまでとして、以下は温泉の商業利用について考察する。

別府郊外の鉄輪温泉にはワニ農場があり、この爬虫類を商業目的で飼育する上で温泉水が重要な役割を果たしている。鉄輪農場は、事業としてかなり成功しているようである。

温泉水を有効活用するもう一つの一般的な方法は、温室に配管して季節外れの植物栽培に利用することである。これは非常に経済的、というよりもそれ以上に収益性の高い方法で、冬場にメロンや野菜を栽培できる。温室のために昼夜石炭を燃やすなければならない園芸業者との競争に勝てるからである。九州の別府や指宿には、こうした温室が数多くある。

鉄泉水は織物の染色に利用される。入浴客はしばしば時間つぶしにこの娯楽に興じ、鉄泉水で染めたタオル、ハンカチ、布地は各地の鉄泉温泉地でお土産として販売されている。この分野は、産業としての地位を確立したと言えるとしても、未だ商業的事業としては定着していない。

また、熱い温泉の湯は調理にも使われる。卵や野菜を



図 5-5. 温泉水で卵を茹でる

茹でたり、さらには米の炊飯まで、温泉街では日常的に見かける光景である。このような温泉の湯は、沸騰すれば火を使わない炊飯器となり、神から人類に授かった最も経済的な贈り物である。

前述のように、宝塚、平野、布引のような一部の炭酸泉水は、非常に良い炭酸水として瓶詰めして販売されている。

以下には、温泉に見られる注目すべき現象について述べよう。

伊豆半島の伊東温泉には淨ノ池と呼ばれる小さな湖があり、ここには熱帯の海水魚が生息している。これは温泉の影響で池の水温が高いためである。この池の住人たちは科学的価値が認められ、現在は国の天然記念物として保護されている。これに関連して、伊豆半島の天城山にある湯ヶ島温泉からほど近い八丁池という別の池についても触れておこう。周囲約半マイル[800m]のこの池は、美しい森に抱かれ、春には周囲の桜が咲き乱れ、秋には紅葉が燃えるように色づいて、風光明媚な景観を誇る。科学的な観点からは、ここに生息する奇妙なカエルが注目に値する。この両生類は、カメレオンのように保護のために色を変える驚くべき能力を有する。水や地面、周囲の常緑樹の葉の色に同化することができる。繁殖期の初夏には木に登り、若葉で巣を作り、そこに卵を産み付ける。その巣は木の枝からぶら下がった紙袋のような形である。

温泉華

鉱泉のもう一つの興味深い現象は、沈殿物の形成である。専門的には温泉華(シンター)と呼ばれ、日本では湯の花と言う。温泉華は鉱泉から沈殿した物質である。こうした堆積物が広範囲に及ぶこともある。例えば、秋田県牡鹿半島には、面積約13,612平方フィート[1,265平方メートル]、厚さ平均約8フィート[2.4m]の石灰質温泉華が存在する。温泉華の堆積物が円錐状を形成する場合、噴泉塔(シンターコーン)と呼ばれる。最も有名なのはおそらく日光山地のそれであろう。奥日光にあるこれらの噴泉塔は、国の天然記念物に指定されている。

温泉華は小袋に詰められ、草津、伊香保、箱根、塩原、別府などの温泉地で家庭浴用に販売されており、治療効果がある。石灰質温泉華は溶鉱炉の融剤として使用されることもある。

間欠泉

温泉のもう一つの特徴は間欠泉である。日本の温泉地でも間欠泉現象は観察されるが、アイスランドやニュージーランドほど多くはなく、世界的に有名なイエロー

ストーン国立公園のような巨大なものは存在しない。これらの間欠泉が定期的に噴出する間隔は、数秒から数ヶ月に至るまで様々である。間欠泉は不規則に噴出することもある。日本には二つの重要な間欠泉がある。おにこうべ一つは観海寺(別府)、もう一つは仙台市近郊の鬼首温泉にある。特に珍しい興味深いものは雲仙間欠泉で、泥のみを噴出する様子は、まるで火山噴火のミニチュア版のようである。

スキーと魚釣り

前述のように、日本の温泉地の特徴の一つは、その多くが美しい景観の中に位置している点である。景観の魅力に加え、スキー、スケート、ハイキング、釣りな



図 5-6. 日光(湯本)温泉の噴泉塔。天然記念物に指定されている

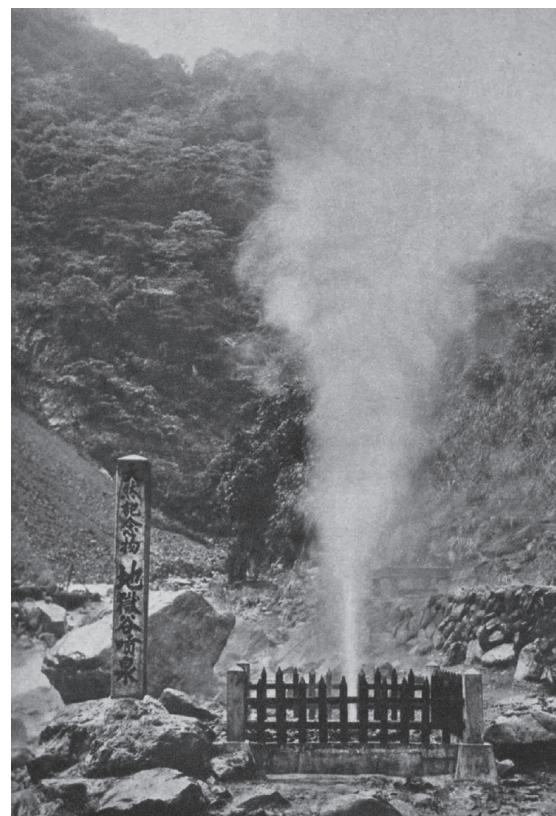


図 5-7. 有名な間欠泉のひとつ、八幡地獄(別府)。天然記念物に指定されている

どの野外レクリエーションでは温泉地を拠点とすることが必要とは言わないまでも至便である。雪の季節には、北海道だけでなく、東北地方でも多くのスキーパークが集まる。言うまでもなく、スキーリゾートの人気は温泉地が近くにあるか否に左右される。また温泉地に近い湖では、良いスケート場となる。昨今の日本のハイキング熱も、当然ながら温泉地の繁栄に寄与している。

最後に、温泉地を釣り人の拠点として考えると、日本は全国的に釣り人の楽園であることから、日本の温泉地を訪れる人々は入浴と魚釣りを同時に楽しむことができる。

多くの温泉は、釣り人が川や湖、海で存分に釣りを楽しむことができ、かつ温泉宿から便利な距離に位置している。そのようなリゾート地としては、日光湯本、長岡、下田、伊東、川治などが挙げられる。釣りのシーズンは概ね春から秋であるが、冬にも熱心な釣り人を惹きつける非常に興味深い釣りの方法がある。例えば、伊香保温泉近郊の榛名湖では、冬になると湖面が凍結し、釣り人はエスキモーのように氷に穴を開け、湖に豊富に生息するワカサギを釣ることができる。



図 5-8. 湯かむり。頭部に温泉水をかける。

VII. 都市近郊の温泉地

以上、日本の温泉について概観した。本章は、国内の主要都市から容易に行くことができる主要温泉地を訪れようとする旅行者の参考に供するものである。

箱根

東京は幸運にも、数マイル圏内に数多くの温泉地が点在している。西へ向かう列車で2時間少々行けば箱根の温泉に着く。美しい山岳風景と設備の整った富士屋ホテルは、西洋人観光客に広く知られている。箱根地域には約12の温泉が点在している — 湯本、塔ノ沢、宮の下、底倉、^{きが}堂ヶ島、木賀、小涌谷、強羅、芦之湯、大涌谷、仙石原。堂ヶ島を除けば、いずれも自動車の便がある。

世界的に有名な富士屋ホテルは、宮ノ下に位置し、小田原駅から車で約1時間の距離にある。残念ながら、上述の温泉はいずれも美しい芦ノ湖(別名箱根湖)の湖畔には存在しない。「日本公式ガイド」や「テリーの日本国ガイド」、あるいは箱根に関するどんなパンフレットでも、この風光明媚で歴史的な景観地の見どころが紹介されている。ここでは、本当に一見の価値があるのは、湖面に映る富士山と、宮ノ下からさほど遠くない長尾峠から望む、頂上から麓まで優雅な姿を見せる山並みであるとだけ加えておく。また、箱根と日本のリビエラとされる熱海を結ぶ十国峠越えの道沿いにも、魅力的な景色が連なる。

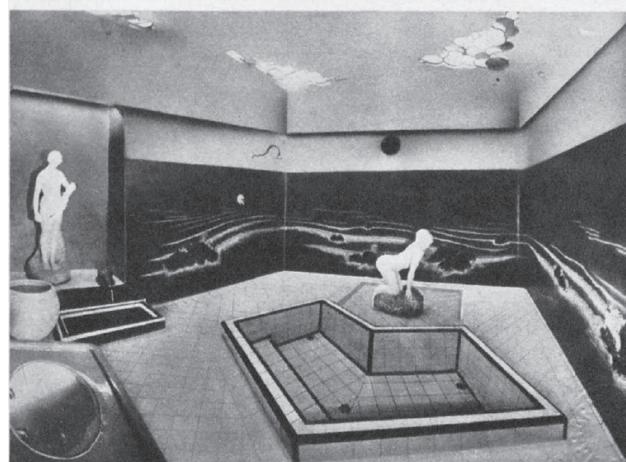


図 6-1. 設備の整った富士屋ホテル(上)とその豪華な浴場(下)



図 6-2. 箱根の芦之湯(上)、堂ヶ島温泉(下)

伊豆

伊豆半島には温泉が豊富にあり、中でも熱海が最も重要な。1934年12月、工学的偉業とも言える丹那トンネルの開通以来、熱海は東海道本線における主要駅の一つとなった。この事実は、この風光明媚な冬の保養地がますます繁栄していることを明確に示している。東京から熱海までは特急列車で1時間50分ほどである。小田原と熱海の間には湯河原という別の温泉地があり、こちらも東京の人々に人気がある。風光明媚な伊豆半島の特筆すべき特徴の一つは、自動車道路網が整備されている点である。熱海から東岸沿いに車で約1時間走ると、伊東温泉がある。熱海から南へ約4.5マイル[7.2km]の位置にある川奈ゴルフ場は、車で約20分である。これは日本最大級のゴルフコースの一つで、現在観光ホテルが建設中である。熱海と半島南端の間には、^{あたがわ}熱川、^{やつ}谷津、^{こうち}峰、湯ヶ野、河内、蓮台寺、下鳴など複数の温泉が点在している。

西岸も同様に美しく、温泉に恵まれている。主要なものは、^{とい}土肥、^{よしな}船原、吉奈、湯ヶ島、長岡、修善寺で、このうち修善寺は最もよく知られており、浴場の一つは天平様式(729-748)で建てられている。西岸を車で走れば富士山を望むことができ、東岸を走れば海に浮かぶ大島の三原火山を見ることができる。どちらのドライブも美しい景色を楽しめるだけでなく、非常に高い崖沿いを走るスリリングな体験もできる。



図6-3. 静寂な谷間の湯河原温泉(上), ファッショナブルな臨海リゾート地の熱海温泉(下)

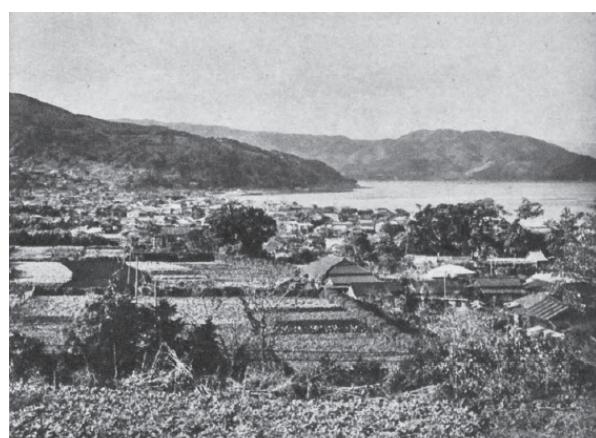


図6-4. 伊豆半島の伊東温泉(上), 修善寺温泉(下)

東京近郊

東京の北と北西には多くの温泉があり、中でも重要なのが日光湯本、那須、塩原、伊香保、四万、草津温泉である。一般的な訪日客訪問者に、東京から鉄道で約2時間半の日光は、自然の輝きが芸術の輝きと見事に調和して一体となる場所としてよく知られている。「日光を見るまでは結構というな」という賛辞はあまりにも有名で、説明の必要もない。温泉は、日光駅から車で1時間半の湯ノ湖の近郊にある。日光湯本温泉は、スキーやスケートを楽しめる雪の季節に多くの観光客で賑わう。夏は釣り人の天国である。伊香保温泉は、赤城山の東側にあり、東京から電車と車で約22時間である。宇部は、真夏でも気温が79°F [26°C]を超えることがほとんどなく涼しい。伊香保は、周囲の森林が紅葉で燃えるように色づく秋が最も美しい季節である。

近隣の榛名湖は、伊香保温泉を訪れる観光客にとって人気のスポットである。この地域の四万と法師は優れた避暑地であり、いずれも真夏の最高気温が79°F [26°C]程度である。草津温泉については前章で既に詳述した。軽井沢から路面電車で約3時間、バスで約2時間である。この温泉の名声は「時間湯」に由来する。塩原温泉は東北本線沿いに位置し、東京から約3時間である。塩原は、この地域の温泉群の総称である。この温泉地の特筆すべき特徴は、魅力的な渓谷の景観と秋の紅葉である。

那須は塩原のやや北に位置する。塩原と同様、湯本、弁天、大丸、三斗小屋、高尾、北湯、八幡、板室(いたむろ)、飯森、新那須などの硫黄泉群がある。この地方で最も興味深い見所は、湯川上流の殺生石と呼ばれる古くから伝わる名所である。那須はまた、時間湯でも知られる。

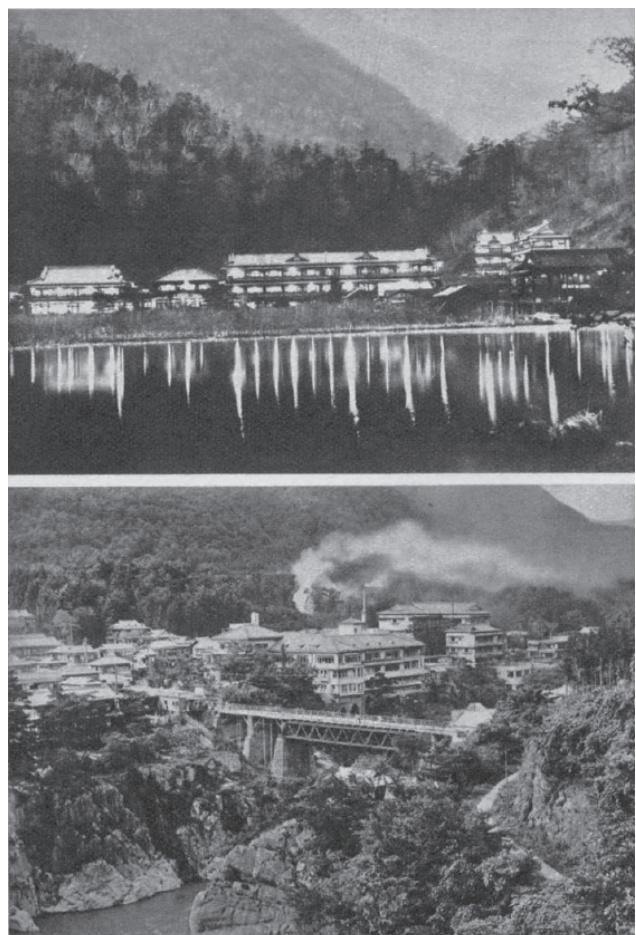


図 6-5. 日光近郊の日光湯本温泉(上), 鬼怒川温泉(下)

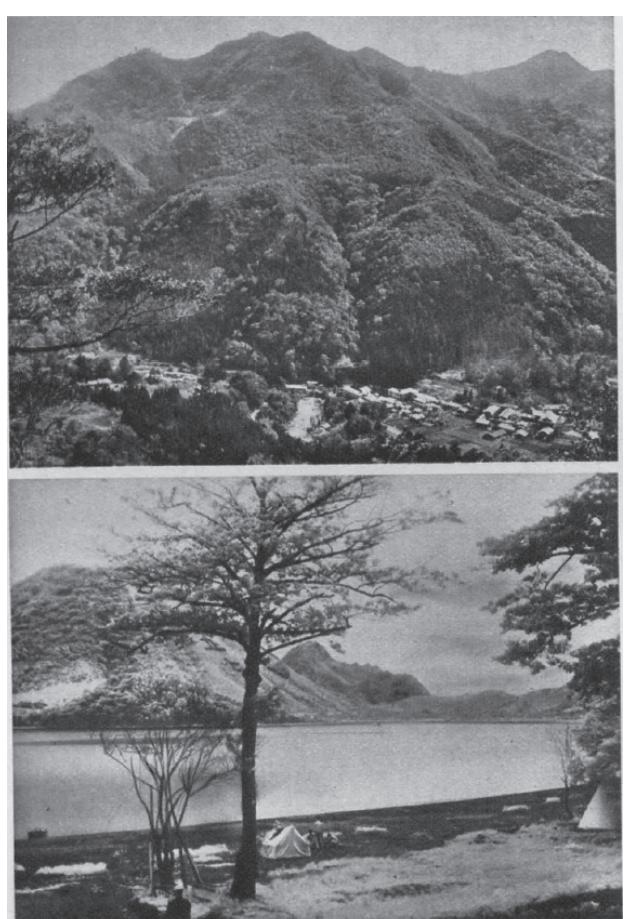


図 6-6. 四万温泉(上), 伊香保温泉近郊の榛名湖(下)

大阪、神戸

大阪、神戸地域は、東京圏ほど温泉に恵まれてはいらないものの、京都、奈良といった古典的な都市が国際的な魅力にあふれた観光名所を携えてごく近くに位置している。大阪や神戸から最も近い温泉地は有馬温泉で、神戸から車で約1時間15分、大阪からは約1時間半で行ける。交通機関の発達により、紀伊半島の温泉地や京都の北西に位置する温泉地も、大阪や神戸からより身近になった。

京都から約5時間の列車の旅で城崎温泉に着く。古くから、京都の人々にはこの弱アルカリ性塩泉の保養地を訪れる習わしがある。魅惑的な景観に抱かれた地である。町の東にある東山からは日本海を一望できる。歴史的な見所である温泉寺や玄武洞（玄武岩の洞窟）などの名所がある。

大阪の南には湯ノ峰、湯川、白浜、勝浦、龍神などの温泉地がある。このうち白浜、湯崎、勝浦は海辺のリゾート地であり、夏場は当然人気が高い。また、紀伊地方は伊豆半島と同様にそれほど寒くないため、冬場も優れた保養地となる。

仙台

東京の北東に位置する最も重要な都市は仙台である。ここは外国人観光客にも馴染み深い。日本三景の一つである名勝松島や、理想的な避暑地である高山に近接しているからである。仙台から容易に行ける温泉地がいくつもあり、中でも最も人気が高いのは青根温泉であろう。仙台平野と松島湾に浮かぶ松の茂る絵のように美しい小さな島々を見渡す絶景を誇る。仙台近郊のもう一つの人気温泉地は鳴子温泉で、電車で約2時間である。鳴子温泉の北約5マイル[8キロ]には、鬼首間欠泉がある。

長野

前述のように、長野県は最も温泉が多い県で、その中心地長野は東京から鉄道で約5時間である。主な温泉は、平尾、野沢、妙高、池の平、赤倉などである。平尾温泉は湯田中、安代、神林、発哺、渋など複数の温泉群の総称で、渋が中心かつ最大規模である。野沢温泉は平尾温泉の北に位置し、優れた避暑地として知られる。この温泉の近くには美しい景観で名高い野尻湖がある。この地方の夏は降雨量が比較的少ないため、野尻湖は理想的な避暑地となり、在日外国人にとても人気がある。妙高、池の平、赤倉はいずれも海拔1830フィート[540m]以上の高地に位置する塩泉である。このうち赤倉温泉はおそらく最も人気がある。日本海を広く見渡す眺望を誇り、その懐には佐渡島が浮かぶ。これは絵のように美しい松島と太平洋を望む仙台近郊の青根温泉と同様である。

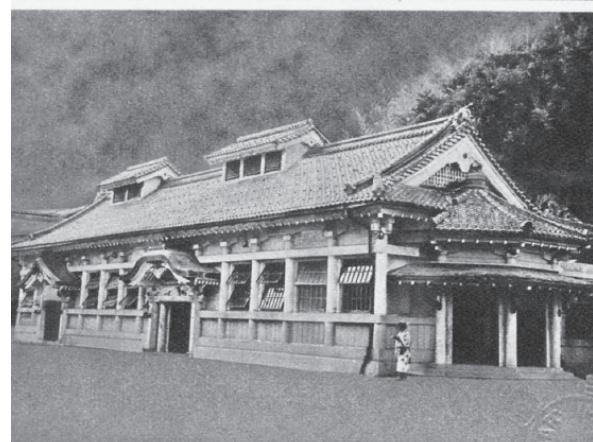


図 6-7. 有馬温泉(上), 城崎温泉の公衆浴場(下)



図 6-8. 紀伊半島の白浜温泉(上), 城崎温泉(下)

金沢

日本海に面する最大の都市は金沢で、東京(上野駅)から鉄道で 294 マイル [約 472km] である。封建時代、金沢は最も裕福な大名、前田家の居城であった。その南西部には複数の温泉が点在し、中でも山中、山城、片山津、粟津、瀬領、辰口、白山が有名である。山中と山城は 8 世紀に遡る歴史を誇る。山中温泉は風光明媚な景色に囲まれている。ここを流れる大聖寺川は絵のように美しい渓谷の景観を呈する。17 世紀の大俳人芭蕉が「奥の細道」でこの温泉を不朽のものとした。山城は山中ほど風光明媚ではないが、それでも非常に人気がある。山城温泉の見どころの一つは九谷焼の窯で、象嵌細工と共に金沢の名産品である。周辺には訪れる価値のある仏寺が点在する。片山津温泉は、周囲約 16km の柴山潟湖畔に位置する。湖では水泳やボート遊びが楽しめ、温泉宿が湖岸に建ち並ぶ。粟津は硫黄泉である。これらの温泉地はすべて電車で結ばれており便利である。

金沢から南へ約 20 マイル [32km]、そびえ立つ白山の麓にも温泉群が点在する。標高 8,865 フィート [2,600m] のこの山は、古来より富士山、立山とならぶ日本三大靈峰の一つとされてきた。これらの温泉地の中でも主要なものは、中宮、白山、岩間である。白山温泉は標高 3,976 フィート [1,200m] に位置し、白山登山の拠点として最適である。当然ながら、これらの温泉地はいずれも暑い季節に賑わう。

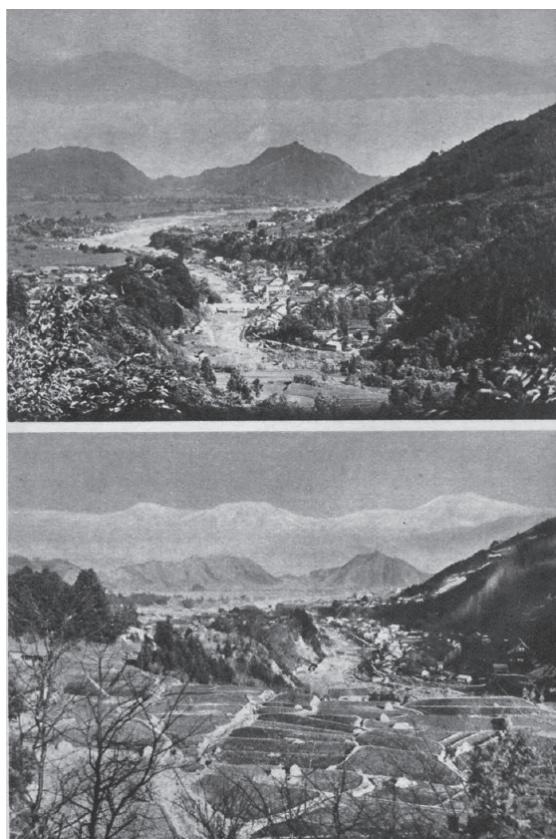


図 6-9. 遠方に妙高山を望む平尾温泉



図 6-10. 宇奈月温泉(上), 芦原温泉(下)



図 6-11. 北陸地方随一の温泉地のひとつ山中温泉。魅力的な景観を楽しめる。

鳥取、松江

大阪の北西に位置する重要な都市として、鳥取と松江が挙げられる。松江はラフカディオ・ハーン（小泉八雲）で有名である。鳥取は大阪から鉄道で約5時間で、九州の別府と同様、市内には複数の温泉（全て塩泉）がある。市の南東には岩井温泉と湯村温泉の二つの温泉がある。山陰本線の岩美駅から岩美温泉までは、自動車や路面電車で簡単にに行くことができる。この温泉は蒲生川沿いに位置し、南東に山を控え大気清涼な地として知られる。この温泉では、湯船の湯をひしゃくで自らの頭上に注ぐ風習がある。温泉から約2.5マイル[4km]北には美しい浜辺があり、海に点在する小島があることから、「山陰の松島」と地元で呼ばれている。岩井のさらに東、前述の城崎温泉の近くに湯村温泉がある。山陰本線浜坂駅から自動車が利用できる。この温泉の荒湯は、非常に高温で、実際に卵や野菜の調理に用いられるほか、温室の加温にも利用されている。

鳥取市の西側には、いくつかの温泉がある。鳥取から鉄道で約30分のところに、浜村温泉と勝見温泉がある。浜沼温泉は海水浴に適した浜辺に近く、勝見温泉は湧出量の多さで知られる。海岸近くの砂丘では、スキーの変形である砂スキーが楽しめる。さらに西方には、松崎、東郷、三朝温泉がある。松崎と東郷は湖畔の温泉としてよく知られ、絵のように美しい景観を求めて多くの人が訪れる。三朝温泉は国内でも数少ない放射能泉の一つで、国内で最もラジウム含有量が高いことが実証されている。その証拠に、国内唯一の設備を備えた療養所が存在する。療養所には、ラジウム放射線の湿式、乾式吸入のための優れた設備が整っている。乾式吸入室の中央には、頂部からラジウムが放射されるように設計された中空のコンクリート柱が設置されている。患者は普段着のまま柱の周囲の椅子に座ることができる。三朝温泉へは、山陰本線安芸駅から車で行くことができる。

松江は鳥取の西75.5マイル[120km]位置する風光明媚な都市で、宍道湖と小泉八雲記念館で知られる。松江近郊には複数の温泉があり、中でも玉造温泉（苦味泉）が最も人気を博している。この地域には多くの洞窟や考古学的に興味深い石棺がある。温泉は松江市民に親しまれる保養地である。有名な宍道湖は、温泉の北側に位置する。松江の東、美保湾に面する皆生温泉（塩泉）は、山陰本線の重要都市米子から約2.5マイル[4km]にある。背後に大山を控え、眼前に美しい海景が広がるこの温泉は、景観においてどの海浜温泉地にも引けを取らない。

四国

四国については、温泉地が非常に少ないとだけ述べるだけで良い。最も人気があるのは道後温泉（単純泉）である。

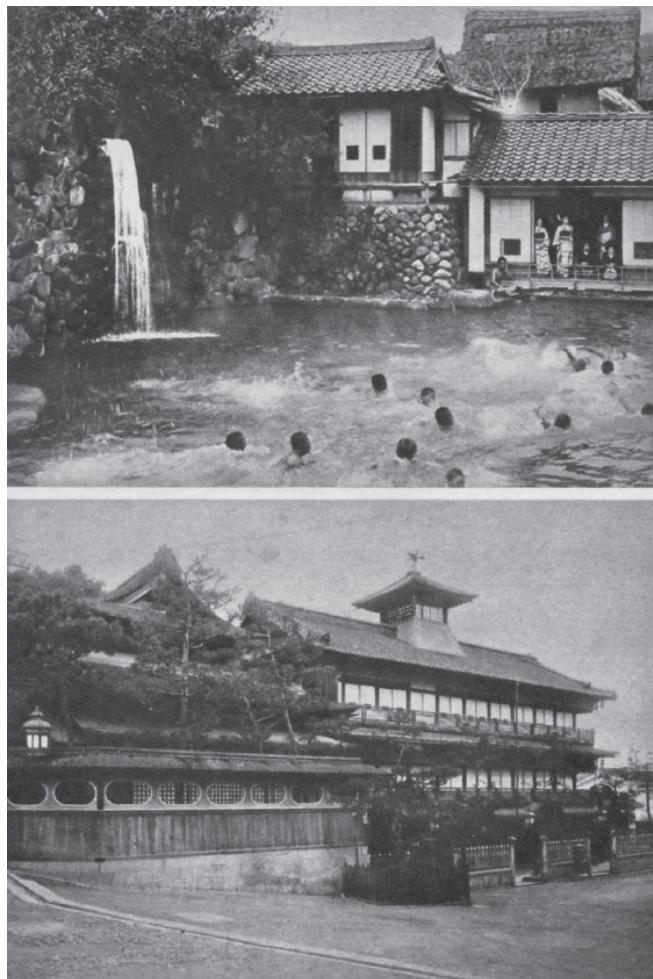


図 6-12. 玉造温泉（上）、道後温泉（下）

九州

九州は温泉が豊富である。主要都市は福岡、門司、長崎、熊本、鹿児島、別府である。中でも外国人観光客に最も親しまれているのは長崎と別府であろう。長崎近郊の温泉では、雲仙温泉が最も重要であることに疑いはない。温泉は長崎から車で容易に行くことができる。雲仙岳の標高 2,385 フィート [700m] に位置し、山と海の景観が魅力的である。雲仙は理想的な避暑地で、毎年上海や香港から大勢の人々が訪れる。宿泊施設、その他設備は、他の多くの温泉地よりも優れている。季節ごとに豊かな魅力に恵まれた雲仙は比類のない温泉郷で、この地域全体が日本の 12 の国立公園の一つに指定されている。

別府は国際的な魅力を持つ温泉郷である。外国人観光客には、日本のカールスバートとして知られる。世界一周クルーズで来日する観光船は概ね別府港に寄港する。大阪と別府の間には、瀬戸内海経由で 1 日 2 便の定期船が就航しており、陸路では門司と鉄道で直結しており、所要時間は約 4 時間である。

前述のように、別府温泉の特筆すべき特徴は浜辺の砂風呂である。この地区には八つの温泉がある。別府、浜脇、亀川(食塩泉)、^{しほせき}柴石(炭酸鉄泉)、^{かんなわ}鉄輪(硝酸・硫黄・炭酸塩泉)、明礬(硝酸塩・明礬・硫黄泉)、堀田(硫黄泉)、観海寺(炭酸鉄泉)。観海寺温泉は、市の背後にそびえる鶴見山の斜面の中腹に位置し、湾の素晴らしい眺望を望む。これらの温泉、特に亀川はその豊富な湯量で名高い。別府の見どころの一つは、この地域でよく知られている数多くの沸騰泉(地獄)を訪れることである。最大のものは海地獄と呼ばれ、深さは 600 フィート [180m] 以上、温度は 194.9°F [90°C] とされる。血の池地獄と呼ばれるものは、その名が示す通り真紅である。

熊本近郊では、巨大な火口で世界的に有名な阿蘇山の麓に温泉群がある。湯之谷温泉には、観光ホテルが建設される予定である。また鹿児島近郊には、霧島温泉と指宿温泉がある。雲仙や阿蘇と同じく、霧島も国立公園に指定されている。別府温泉と同様、指宿温泉では砂浜で砂風呂が楽しめる。しかし、これらの温泉地の宿泊施設は、別府や雲仙ほど満足のいくものではない。

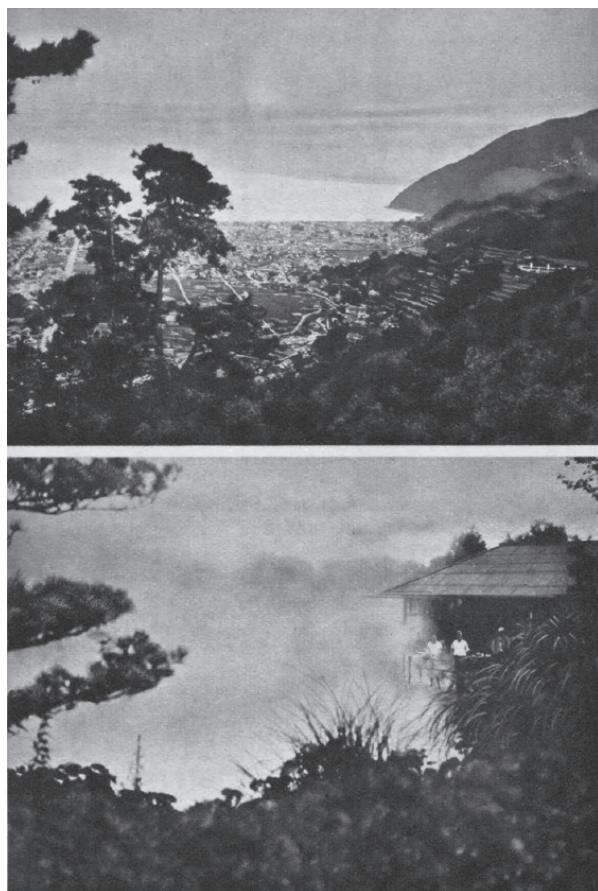


図 6-13. 別府温泉の市街(上)と沸騰泉(地獄)(下)



図 6-14. 指宿温泉の砂風呂(上)、阿蘇山麓の栃木温泉(下)

北海道

九州から北海道までは、非常に遠い。実際、北海道は東京からも遠く、この温泉に恵まれた広大な島を訪れようとする人々にとって、その距離は確かに障壁となっている。北海道で最も重要な温泉は、間違いなく登別温泉である。室蘭から 15.3 マイル [24km](北海道の玄関口である函館から 128.6 マイル [210km] の距離にある。登別温泉は北海道の自然の驚異の一つであり、この島を訪れる者は誰もが訪れるべきである。この温泉は、その水量の潤沢さだけでなく、化学的構成が多様である。少なくともこの点では、九州の別府温泉を思わせるものがある。温泉は、森林に覆われた山々に囲まれた大きな渓谷の魅力的な場所に位置している。地獄谷の見事な光景は、周囲約 1 マイル [1.6km]、深さ約 400 フィート [120m] の巨大な火口で、温泉から湧き出る噴泉塔や石灰華丘がたち並ぶ。

登別市の北西には、洞爺湖岸にいくつかの塩泉が点在している。他の多くの湖畔の温泉と同様、その風光明媚な立地で知られている。

島の西端近くには、もう一つの湖畔温泉地として知られる阿寒温泉がある。阿寒は、国立公園に指定されているこの地域にある美しい湖の名前である。

札幌近郊には定山渓温泉が、函館近郊には湯の川温泉がある。

以上は、日本の主要な温泉の極めて不完全なリストに過ぎない。このテーマに関する詳細な科学的情報については、石津利作博士著「日本の鉱泉」、日本政府鉄道発行「日本の温泉」を参照されたい。



図 6-15. 日本の 12 の国立公園のひとつ北海道の阿寒温泉（上）、
登別温泉（下）